みつばち

凛屡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
みつばち

【Ｎコード】
Ｎ８７９２Ｃ

【作者名】
凛屡

【あらすじ】
今世間を騒がしているモンスターパンクバンド。「ＷＯＲＬＤＥＮＤ」。彼女達を支えるいろんな人達。あの日あんな事が起きなかったら、あたし達は一生出会う事なんかなかったんだよね。

第1話#それぞれの日々

「うざいアンタ達に一言。嫌われて結構、なんとでも言え。」

大勢のレポーターとカメラ。
テレビに映った奇抜なメイクとファッションの出で立ちな彼女はそう言って
世間を騒がしていた。

暑い暑い夏の午後。
あたしはあなたを知ったんだ。

あたし、佐藤　遥＞サトウ　ハルカ＞２０歳。
都心から少し離れた場所にひっそり建ってある煉瓦造りの図書館でアルバイトしている。

「い、以上！ワールドエンド、ライブ直前の控え室前からの中継でしたっ。
スタジオに返します！」
「いや～、鈴木さん。彼女の毒舌ぶりは相変わらずですね～。」
「そっ、そうですね～。今後も期待しましょう！でわ、続いては占いでーす。」

久しぶりのバイトがない日曜。
お昼過ぎまでさんざん寝まくったあたしは、リビングでせわしく鳴

っていた報道番組を
なんとなく見ていた。

「ねーちゃん、寝すぎ。もう3時回ってんじゃん。」
「いーの！バイト今日ないし。」

弟の大地。１８歳。専門学校生。

「ねえ大地、さっきからやってるこの報道なに？どこのチャンネルにしてもこればっか。」
「え”っ！！知らねーのかよ。最近デビューしたパンクバンド。」
「パンクバンド？？」
「うん。演奏の時のパフォーマンスが超迫力！ボーカルもすげえべっぴんサン！
でもなんかテレビとか見てるとヤベーよ。」
「ヤバイって何が？」
「イッちゃってるもん。」

時計は夜9時をさしている。
真夏の夜は風がなく、呼吸がしにくい。
空は重く、真っ暗だ。
ライブが終わった会場からたくさんの人が出てきている。

泣いている子

興奮している子

怒っている子

怪我をしている子

いろんな人がぞろぞろ帰って行く。

「ライブ大盛況だったな！みんなお疲れっ。でも蜜のテレビインタビューは最悪！
マネージャーの俺が頭さげなきゃいけないんだからさ～。頼むよ～。」
「まあまあ、大橋チャン！今日のとこは大目に見てよ。」
「そうそう！ライブも成功したし。」
「蜜ちゃんのそーゆーとこがウリなんだし！ねえ蜜ちゃん」
「いやなんだからしょうがないじゃん。別にあたし好感度とか興味ないし。」

今世間を騒がしているパンクバンド。

ＷＯＲＬＤ　ＥＮＤ

ボーカル兼作詞担当、灰吹　蜜＜ハイブキ　ミツ＞
ギター兼作曲担当、蓋＜ガイ＞・・・リーダー。まとめ役。
ベース担当、呂氣＜ロキ＞・・・無類の女好き。
ドラム担当、音＜オン＞・・・バンド内のマスコット。

紅一点の彼女率いるこのモンスターバンドがモノクロだった日本に光を与えた。

あー、もう。

マスコミとか、テレビとか、取材とかクソくらえだ。
みんなうぜえよ。
だからメジャーデビューなんかしたくなかったんだ。
どこ行っても同じ喋り方するやつばっか。
たまには違うこと言えねえのかよ。

こんな世界、早く終わりがきたらいい。
こんな世界にあたしの居場所なんか・・・ない。

「はーい！真智くん！目線こっち。」

とあるスタジオでカメラのシャッター音が鳴り響いている。

「終了〜！！おつかれ！ポラ確認しといてね。」
「はい！おつかれっす。」

ふー。疲れた。足いてえ。

腹減ったなあ・・・よし！帰りは牛丼食って帰ろう！

外あちー、無風じゃん。

この暑さ異常だな。

「あっ、あの！読者モデルの真智クンですよねっ？？」

「あ、そうです。」
「えっと・・・迷惑だとは思ったんですけど、これ差し入れですっ！」
「ありがとう！中身何？」
「クッキーです。」
「マジ？オレ甘いのすっごい好き！」
「ホントですか！？よかった～！あ、あのじゃあ頑張ってくださいっ！
それじゃっ。し、失礼します！」
「えっ、あ！あの・・・」
足、はえ～・・・。

「真智はモテんな～。うらやましいったら。」
「先輩！見てたんなら声かけましょーよ。」
「わりっ。そんままファンの子お持ち帰りするか見たかったんだけど。
謙虚だな～、真智クンは」
「先輩じゃないんだからそんな事しませんよ。」
「お～？？言うな、てめ。罰としてメシおごれ！行くぞっ！」
「なんすかソレ！？ちょっと待って下さいよ～！」

オレ、和泉　真智＜イズミ　マチ＞。２３歳。
某有名雑誌の読者モデル兼、大学生。
ぶっちゃけ女にはモテる。この仕事のおかげもあって。

でもオレは女には興味がない。

ここまで言えばわかると思うが・・・

オレは・・・・

まあその辺はあえて伏せとこう。

オレの想い人は雑誌のトップモデルの豪＜ゴウ＞先輩。２８歳。
まあ～浮気癖はあるは、フラフラしてるは、風船みたいな人だけど
芯は硬くて、何でも自分が納得するまでとことんやる人だ。

オレの想いは絶対叶わないけど、先輩の側で友達としてやっていく
だけでも幸せだ。

世の中のオレのかわいいファン達よ、スマン！！

「遥～！こっちこっち！」
「アヤちん！久しぶり～っ！！や～変わってない～！！あはは！」
「そこ笑うとこか！？早く入ろっ。あたしお腹ペコペコ！」
「うんっ！」

今日は高校時代の友達と久しぶりの再会をしている。
雑誌で取り上げられたりしているおしゃれカフェで夕ごはん。

「おいし～～！！幸せっ」
「ぷっ！遥って食べてる時の顔、かなりウケるよ」
「何でよ～！アヤちんこそ変な顔だよ！」
「これは元々の顔じゃ、バカちん」

アヤちんは高校一年の時から、三年間ずっと同じクラスで
入学当時、クラスになかなか溶けこめなかったあたしに一番最初に
声をかけてくれた。
人なつっこくて明るくて、オシャレさんな上に運動神経もスタイル
も抜群っ！
おとなしかったあたしをいつも引っ張っていってくれた。
あたしの大切な親友。

「コレさ職場の先輩にもらったんだけど、遥一緒に行かない??」
「え?なーにー?」
「今話題のワールドエンドのツアーチケット。
なんか先輩達が仕事入れられて行けなくなっちゃたらしくて貰った
んだけど、
一人で行くのも寂しいしさ～・・・」
「あ！知ってる！よくテレビ出てるよね?」
「そうそう！パンクバンドって苦手だけど、もったいないし。
タダで貰ったから行ってみない?」

あたしもパンクは興味ないな～・・・
でもせっかくアヤちんが誘ってくれてるし・・タダならいっか！

「うん！行こうよ！もったいないもん」

「ほんと〜！？じゃあこの日空けといてね。また近くなったら連絡する！」

9月5日。
ちょうどバイトも運よく休みだった。
今思えばこれは神様が仕組んだ事だったのかな。

「なんかスゴイね！このバンドのファンみんな濃ゆいわ〜！
遥っ！！離れたら一貫の終わりだからねっ！どこに流されるかわかったもんじゃないよ」
「アヤちん〜あたしすでにギブかも〜。死ぬーーー」

ライブハウスは思いのほか狭くて、ぎっちぎちに客を入れてるから前の人が足踏むわ、横の人の腕が当たるわ、後ろの人が押してくるわで
身動きが全くとれない。

熱気がすごい。

まるでサウナ状態だ。

まだライブは始まってないのに全身の毛穴という毛穴から汗が吹き出している。
体力がないあたしにはかなりツラい。

ダンっ・・・

ドラムの音が鳴った。
それに続きベースとギターも入ってくる。

「ちょっと遥っ！メンバー全員イケメンじゃない！？」

「えっ？？何？全然聞こえないよ～！！」

アヤちんが隣で何か言ってるけど聞こえたのは最初のあたしを呼んだとこまで。
もう一度聞き返そうとしたその瞬間、オーディエンスが更に一気に増した。

「蜜ーーーーーーー！！！！！！！！！」

小さな会場めいいっぱいに響く声。

彼女が現れた。

「てめえら、死ぬ気でついてこい。」

唖然としたあたしの目に映ってきたのは、
長い黒髪。

スラッとした手足。
真っ赤な口紅と、真っ赤なネイルカラー。
ハスキーすぎる声。
歌っているのか、叫んでいるのか分からない。

演奏が始まってまだ30分も経ってない時だった。
隣にいたはずのアヤちんが波に押されて隅の方にいったと思ったら
いきなり姿が消えた。
途端に暴動がおき始めた。

「アヤちんっ！！！！」

目まぐるしくライトが光ってみんな興奮状態になっている。
ベースの音が重く心臓に響く。
鼓膜が破れそうなくらい激しいドラムの金属音。
今にも倒れそうだ。

アヤちんの姿を確認した。
彼女は足元でうずくまっていた。
手で額を覆っている隙間から血が見えた。

「アヤちん！！ちょっとどいてっ！！！どいてっ！」

人並みを必死にかきわけてアヤちんがいる場所にたどり着く。

うるさく鳴り続いていた演奏が止まった。

「演奏聴かないやつは帰れ。やる気なくした。」
そう言って彼女は暴動が起きている方にマイクスタンドごと放り投げ
ステージの裏に歩いて行った。

みんな凍りついている。

静まりかえった会場にアナウンスが流れた。

「えー、ただ今乱闘がありまして負傷者が出ましたので演奏中止とさせていただきます。

申し訳ございませんがすみやかに退出してください。」

「なんだそれ！ふざけんな！」

「こっちは金払って見にきてんだ！まだ1時間もたってねーじゃん！」

「そうだそうだ！金返せー！！！」

ブーイングの嵐の中、ステージに彼女が戻ってきた。

「うるせえ！！こうなったのはてめーらのせいだろうがっ！！

消えうせろハゲ！二度とくんな。」

ライブハウスがもぬけの殻になった頃、たんかで運ばれたアヤちんはライブハウスの裏の医務室で手当てを受けていた。

アヤちんの横でケンカがおきてたらしく、巻き添えをくらってしまっていたのだ。

幸い怪我は額を少し切っただけで大事には至らなかった。

「アヤちん！！大丈夫？！」

「うん！全然平気！びっくりしたけど。」

「申し訳ございませんでしたっ！！！」

横で青ざめてひたすら謝っているのは彼女達のバンドのマネージャーさんだった。

奥からそれぞれバンドのメンバーが走って駆けつけた。
「大丈夫ですか！？」
「すみませんでした。警備の体制が甘かったばっかりに・・」
「血、とまりましたか？？！」

改めて目の前にする４人のメンバーはみんなとてもきれいな顔立ちをしていた。
アヤちんは怪我の事なんかそっちのけで握手をしたり写真を撮ったりしている。

「なんだ。元気じゃん。」
ずっと後ろで腕組みをしていたボーカルが初めて口をひらく。
「蜜！なんだとはないだろう。俺らのライブで怪我させたんだ。謝れ。」

ギターの人が彼女をどなりつける。
この人がリーダーなのか・・・

「あの、私なら全然大丈夫ですんで！」
「ちょっとアヤちんっ・・」
「ホラ。大丈夫つってんだからいーじゃん。大体パンクバンドのライブなんだし、
こんぐらいの怪我でわーわー騒ぐなよ。その程度の怪我なら日常茶飯事なんだよ。」
「蜜！」
ギターの人が彼女の名前を呼ぶのとほぼ同時にあたしは怒鳴った。

「あやまって！」
「あ？」

自分でもびっくりした。
まさかあたしがこんな事言えるとは・・・
「小さい怪我で済んだからいいかもしれないけど、一歩間違ったら大怪我だったんだからっ！
自分のバンドのせいで負傷者が出たんだから謝るのは当然でしょ！！」
「遥っっ、あたしなら大丈夫だか・・」
止めるアヤちんの言葉を封じこめる。
「大丈夫なんかじゃない！！」
「・・・てめ、誰に言ってんのかわかってんのか」
鋭い目をあたしに向けて低い声で彼女が言う。
「あなたに言ってんの！！こんなバンド最低！いこ！アヤちん！」
「あっ、ちょっと待ってよ遥！すいませんでした！もう気にしないでください。
失礼します！・・・・・遥ー！！」
「クソが。あの女、ナメた口聞きやがって」
「蜜にあっこまで言える女の子がいたんだな。」
「蓋！！黙れ。」
「す、すいません・・」
「は～また大変な事になったな～。今からまたドッとマスコミが来るぞ！
みんな早く着替えてホテルに帰ろうっ！」
「ねー大橋チャン、オレ腹減った～。」
「そんなのあとだー！！！」

第1話#それぞれの日々（後書き）

初めまして、凛屡と申します。今回初めて小説を書いて見て改めて難しいなと思っています。
文章が気になる箇所もあると思いますが、どーぞ長い目で見てやってください。。。

第2話#真智

「真智ー！おはよ！」
「花澄。はよ。」
「真智が朝からガッコきてるなんてめずらしーね。
今日は雑誌モデルの仕事休みなんだ？」
「うん。でも久しぶりに早く起きたらねみ～・・・ふあ～」
「おっきなアクビ（笑）」

今日はなんとなく大学に来てみた。

花澄とは取る授業がいつもかぶってていつのまにか仲良くなった。

彼女はオレが同性愛者とは知らない。

この事を知っているのはウチで飼っている猫のニャン太だけだ。

「てかお前！この前オレの素敵なダチの小川の事フッたらしーな！
可哀想な事すんなよ～、も～。アイツの落ちこみ様すごかったんだぞ。」
「だって～、好きでもないのに付き合えないでしょ！
そんな事したら相手に失礼だよ！」
「・・・お前、意外と古風だな。今時さ～両想いじゃなくても付き合うのがフツーなのに。
そっから恋に発展するもんじゃん？」
「とにかく！あたしには心に決めた人がいるのっ！
誰が何と言おうが今は誰とも付き合う気はなーいーの！！！」

花澄の事を詳しく説明すると、言わば学校のマドンナ的存在だ。

上品な顔立ち。
幼さが残る声。
髪は腰くらいの長さで淡い栗色にゆるめのパーマをかけている。
服装も男が好きそうなクラシカルなパステルカラーを基調とした服が多い。
彼女の事を狙っている男は数えきれないぐらいいる。

「その心にきめた人にはお前の気持ち伝えたの？」
「・・・まだ。片思いの乙女には自分を磨く準備期間が必要なの！真智みたいなのにはわかんないよ！鈍感だから。」
「鈍感で悪かったな！」

お前なら大丈夫だって。
どこにこんな美人ふる奴がいんだよ・・・。
ここにいるけど。

花澄はいい女だよ。

だからオレはお前には幸せになってもらいたい。

「ワールドエンド、またなんかやったらしーぞ。」

友達の小川っちと食堂で昼ごはんを食ってると興奮した様子で雑誌を見せてきた。
言っておくが、友達は友達であって恋愛感情は全くない。

「小川っち、花澄に振られて元気ないかと思ったけど元気なんじゃん。」

「ったりめーだ！！一回振られたぐらいで俺はあきらめん！」
「すげーな。その根性。で？ワールドエンドが何だって？」
「これ！見てみろよ！今日発売のｍｏｎｄａｙ！ライブ中に暴動が起きて中止だって。
前代身問じゃね？」
「あ～オレこいつら苦手！特にボーカルの女が態度でかいのが気にくわん！」
「俺も！でも美人なとこがそそられる～！」
「小川っち、花澄に言いつけるぞ。」
「そ！それだけは！！・・・てゆーかお前のモデルの先輩いんじゃん。
どの雑誌にも引っ張りダコの・・・えっとなんだっけ？」
「豪センパイ？」
「あ！そうそう！その先輩の妹らしーな。何かのスクープ誌で読んだんだけど。
お前知ってた？」
「え・・・豪センパイの妹って誰が？」
「だから！ワールドエンドのボーカル。」

あの時はまさかお前が豪センパイの妹とは思いもしなかったけど
オレ達を引き合わせてくれたセンパイに感謝したい。

夏もあと少しで終わろうとしていた。

第2話#真智（後書き）

第2話を最後まで読んでくれた方、どうもありがとうございます。
基本的に私としては花澄みたいなタイプ、好きです。
花澄のモデルはエビちゃんです・・・（汗）

第3話#再会

今日も暇だな～・・・

最近は雨ばかり降っている。
図書館のカウンターに一人座って、降り続く雨のしずくをボーっと眺める。

住宅街にあるこの図書館はあまり知られてないせいか
めったに人が来ない。
その割に閉鎖もしなくて給料もなかなかいい。
人付き合いが苦手なあたしにとっては天国ともいえる。

「それにしてもあのワールドエンドとか言うバンドのボーカル、報道とかで叩かれる訳がわかったわ。あの人、ほんっと最低！」

一人で文句を言っていると、図書館の入り口のドアが開いた。

「あ。いた。」

「！！？」

入ってきたのは今あたしが文句を言っていた帳本人だった。

「ワ、ワールドエンドのっ！」
「覚えてるよな？あんだけあたしに罵声あびさせたのに、
忘れたとは言わせねーよ。」
「なっ！！なんでっ？！」

あたし殺される！？

「この前のことはごめんなさいっ！！だっ、だから殺さないで～！！！！」
「はあ～？？何言ってんだよ。コレ！忘れて行っただろ！」

差し出されたのは財布だった。
あの日、かなり激怒していたあたしはアヤちんに飲み物を買おうとしていて
財布を手に持っていた。
そこにあなたが現れてあんな事を言い出したもんだから
財布を近くのイスに置きっぱなしにしてそのまま忘れて帰ってしまったのだ。
気づいたのは帰りの電車の切符を買う時だったけど、
アレだけ周囲の目も気にせず大声で怒鳴った後に戻るのも気が引けて
アヤちんに電車賃を借りてしぶしぶ帰っていた。
（こーゆー事がよくあるあたしは、使おうと決めたときにしか大切なカードとかを財布に
いれないようにしていた。）

「心配しなくても何にも取ってねーから。てか取りに戻れよ。」
「えっ！でもなんでバイト先まで分かったの？」
「アンタんちに電話したらココ教えてくれた。」

「で、わざわざ!?芸能人なのにっ??」
「暇だったから。それにこの図書館、あたしの親父が経営してるから。」
「えっっっ!!!!!??? 」
「アンタさっきからいちいち声でかいよ。」

あまりの突然な出来事に頭の中がグルグル回る。
まさかこの図書館を彼女のお父さんが経営してるなんて。

「全然人いないんだね、ここ。よくつぶれねーな。」
「あ、あの・・」
「なに?」
「ありがとう。」
「別に。」

そんなに悪い人じゃないのかもしれない。
わざわざ届けにきてくれるような人だもん。

より一層激しく降りだした雨音が静かな館内にこだまする。
彼女はあたしに財布を渡しても席を立とうとしない。
人気絶頂バンドのボーカルなのに、服装もTシャツにジーンズとシンプルな
格好で変装用のサングラスなどもしていなかった。

「戻んなくていいんですか？」
「戻ったってつまんないし。ココにいた方がマシ。」
「あの、なんで歌手になったんですか？・・・楽しくなさそうなのに。」
「アンタ結構ズバっと言うよね。」
「ご、ごめんなさい。」
「あたしは別になりたくて歌手になったんじゃない。
デビューもしたくなかった。でもメンバーがどうしてもやりたいっていうから。」
「は、はあ・・・」
「芸能界なんかアンタ達が思ってるような世界じゃない。
どこ行っても何しててもも監視されて、テレビ用に笑顔作んなきゃいけない。
自分らしくしてていいって言うからあたしはこのままの自分でテレビに出たら
バッシングとか中傷とかめんどくせー事になるし。最悪だよ。」

彼女はあごに手を付き、うつむいた。

「・・・あの！お腹すきません？」
「え？」

そう言って半ばあなたを強引に外に連れ出すと
さっきまでドシャ降りだった雨が嘘みたいに止んでいた。
どうせ誰もこないだろうと思って図書館を空けて足早に住宅街を駆け抜ける。

少し困った表情の彼女。でも手を離せなかったのは、

彼女の胸の奥に深い深い暗闇が見えたから。

第3話#再会（後書き）

蜜と遥の再会・・・。無理やり再会させました。
現実にはない事だとは思ったのですが・・まあ、これからもお付き合いください・・・

第4話#豪

「センパイ！豪センパイ！」
「ん～？なに～？」
「オレの話聞いてました？！」
「聞いてねかった！わりっ。何だっけ？」

雑誌モデルの仕事で早くスタジオについたオレは、休憩中の豪センパイを見つけた。
すかさずセンパイの元に駆け寄って例の話題をふった。

”お前んとこのモデルの先輩の妹、ワールドエンドのボーカルだって”

昨日からオールで遊んでたらしく、センパイはかなり眠たそうだ。
オレの話も上の空状態だ。

「だ～か～らっ！ほんとにセンパイの妹ってワールドエンドのあのボーカルなんすか？」
「うん。ほんと～。あれ？俺言ってなかったっけ？
お前には言った気がしてたわ～。」
「てゆーかそんな事言っていいの？」
「いんじゃね？別に。アイツも何にも言ってこねーし。」
「でも全然似てないっすね。」
「あ～よく言われる！・・って当たり前か！血は繋がってねーから！がはは！」
「え！！？」
「ちっさい頃に俺の母親とアイツの父親が再婚したんだ。
まだ俺が小学生高学年くらいかな。そんころから一緒に住んでたから

もうホントの兄妹みたいなもんだけど。」
「へ～！えっ、じゃあ今も一緒に暮らしてるんですか？」
「いや～！さすがに今はみんな別々だべー。お袋達は一緒に住んでるけど
俺は高校入ってから家出て一人暮らししだしたし。アイツも確か俺が出た後すぐ
出てったみたい。連絡とかもとんねーから詳しくはわかんねーな。」
「センパイすげ～～～！オレちょっと興奮してきた！
身近に芸能人の兄妹がいたなんてっっ！」
「ちっちゃい時は可愛かったんだぜ？アイツも。おにーちゃん、おにーちゃんって。
今はあんなおっかなくなってっけど（笑）」
「ふーん、そうなんだ～」

オレ今ちょっとムっとしてたな。
顔に出てなきゃいーけど・・・。

「あっ！そうだ。真智！今日帰り俺んち寄れ！」
「え！？」

え！？？なんで急に？

まさかオレの気持ちバレたとか？？！

「お前に教えて欲しいことがあんだよ。」

暦上ではもう秋だ。

黒いペンキで隙間ができないように念入りに塗られたような空に
三日月が光に包まれながら揺れている。
時折ひんやり冷たい風が頬を刺激する。
それはなんとなくオレの心臓をつつく胸騒ぎと似ていた。

「お帰り、豪〜！！」
センパイが家のドアを開けるやいなや、女の甲高い声がオレ達を出迎えた。

「サクラ来てたの？」
「うん！あ、友達？」
「仕事仲間の後輩の真智。」
「真智くん？！知ってる！よく豪と一緒に雑誌出てる人だ〜。」
「あ、あのセンパイ、こちら・・・」
「あ〜彼女の、サクラ。お前より1個上。」

何かを期待していたオレはあっけなくその一言で崩れ落ちた。
「で！なんなんですか？オレに教えて欲しいことって。」
一気に力をなくしてセンパイにたずねる。
「これだよ。このゲームの攻略法！どうしても前に進めねんだよ！お前、前にこれクリアしたって自慢してたじゃん。教えろよ！」
「・・・・」

なんだこの仕打ちは。

オレの馬鹿〜〜〜〜〜っ！！！！！！！！

「ねえねえ！真智くんもごはんまだでしょ？カレー作ったから一緒に食べてかない？」

「え！いいんですか？やった！」

「真智、メシ食ったらさっさと帰れよ〜。サクラと久々に会ったんだから

イチャイチャしてーんだからよ！」

「ちょっと豪！何言ってんの？ばか！」

「はいはい、わかりましたよ。」

サクラさんか。

なんか今まで豪センパイと付き合ってた人達とは違うな・・

なんてゆーか、地味？

でも豪センパイもなんか雰囲気が違うな。

顔ゆるんでるし。

ずっとサクラさんの側にいるし。

・・・・きっとすごい好きなんだろーな。

オレ、またもや玉砕か。

あ～・・・胸がいてえ。

ピンポーン・・

誰だよ、人がせっかくしんみりしてたのに。

「誰だ？」

センパイが席を立つ。
まだ玄関に辿り着いてないのに呼び鈴を鳴らした客はおもむろにドアを開けた。

「！？」

「センパイ～？誰っすか？まさか浮気相手、登場～？みたいなっ？」
オレが身を乗り出す。
そこにはとても意外な人物が立っていた。

「み、蜜・・・？」

「よ。」

初めてお前を見た時の胸の高鳴りは忘れもしねーよ。

お前はやっぱりテレビで見る時と一緒の顔をしてた。

至上最悪に愛想のない女。

第４話＃豪（後書き）

真智と豪とサクラのシーンをもうちょっと書きたかったのです・・・
あのほのぼのした雰囲気を！

でも仕事疲れのため、あきらめてしまいました・・
こんな私に愛の手をください・・（切実）
コメント待っています。

第5話#蜜

「ねえパパ、どこ行くの？」
「新しい家族のとこだよ。ほら、ここが今日から蜜とパパの家だ。」
遠い昔の記憶がよみがえる。丘の上の新築の一軒家。
周りは一面中コスモスが生い茂っている。
心地いい風に吹かれて花の甘い匂いが香る。
玄関のドアを開けると人の気配がした。
女の人の声と子供の声。
「初めまして、蜜ちゃん。今日から私があなたのママよ。
こっちは蜜ちゃんのお兄ちゃんになるかしらね。」
「は、はじめまして。」
優しそうな女の人。
その人の後ろに隠れながら男の子があたしに向かってあいさつをした。
「蜜、おまえのお兄ちゃんになる豪くんだよ。
おまえより４つ年上だから小学校６年生だ。」
「ごう？」
「そうだよ。仲良くするんだぞ？」
月日は流れてあたしと豪は仲良くなっていった。

「お兄ちゃん！今日ね蜜、数学のテストで１００点取ったんだよ！すごい？すごい？」
「お～！蜜あたまいいな～！俺なんかまた２０点だったぞ！」
「蜜、お兄ちゃんに勝った～！ママ～！蜜、お兄ちゃんにテストで勝った～！」
「え！ほんと～？蜜ちゃん、すごいじゃない！じゃあ今日のおやつ増やしちゃう！」
「なんだよ～！そんなのずり～！」

この頃はすごい毎日が楽しくてしょうがなかった。

優しい母と、ふざけて笑いあえる兄。そしていつも疲れて仕事から帰ってくるのに
絶対あたしの話を微笑みながら聞いてくれる父。

こんな日がずっと続いていくんだろうなと思ってた。

あたしは中学生になって、豪は高校生。

成長していくにつれて、あたし達は年頃のせいかあんまり会話はしなくなっていた。

時々、豪が家に彼女を連れてくる。

あたしはいつも無償に腹をたてる。

「ねえ蜜ちゃんは好きな人とかいないの～？」

クラスメイトの友達が聞いてくる。

「そんなのいないよ～。」

なんて事を言いながら、あたしの胸の中にはいっつも豪がいた。
高校2年にあがった豪は悪い友達と付き合いだして家に帰ってくるのは
夜中になりだし、どうかしたら帰ってこない日もある。
髪を茶色に染め、ピアスもあけ、たばこも吸い出した。
両親が寝静まるのを確認したあとに夜な夜な女を連れ込んでセックス。
お決まりのパターンだ。

あたしが気づいてないとでも思ってるのか。

隣の部屋から毎晩聞こえてくる女のあえぎ声とベッドの軋む音。

頭がおかしくなりそうなのと同時に

涙が溢れ出る。

そう。

あたしは確実に豪の事を好きになっていた。

そんなモヤモヤを必死に押し殺した日々が続いたある日のこと。

「あのさ、俺家出てくわ。」

豪の突然の家出宣言。反対する両親には目もくれず着々と荷物をまとめだす。

このままじゃ豪がこの家から出て行っちゃう！
そんなのヤダ！！
どうにか豪を出て行かないよう秘策を考え続けた。

学校の授業が終わって一人で帰る道に昔、豪とよく遊んだ原っぱがある。

「なつかしーな・・・」

物思いにふけっているとシトシトと雨がふってきた。
傘を持ち合わせていなかったあたしは全速力で走る。
しだいに雨雲は強くなって雷も鳴り出した。
家に帰りついた時にはもう何もかもびしょ濡れだった。

「さむっ！タオル、タオル・・」

また同じように全身水をかぶったような豪がドアをあけて帰ってきた。

「あ、・・・おかえり。」
「おう。お前もびしょびしょじゃん。タオル俺のも取って。」

「うん。」

リビングの戸をあけてテーブルの方に進むと置手紙がおかれている。

両親からだ。

買い物に行ってくるから帰るのは7時過ぎになるとの事。

その途端心臓が高鳴る。

今この家にいるのは豪とあたしの二人だけ・・・

落ち着け、あたし！

「ね、ねえ。」

「ん？なに？」

「今日だっけ？家出てくの」

「ああ。夜な。」

豪はやっぱりこの家を出てく・・・

やだ・・・

いやだ。

離れないで・・・

「豪、あたし達ほんとの兄妹じゃないよ。」
「知ってるよ。それがなに？」
「好きなの。ずっと・・・ずっと前から好きだった。
最後でいいから・・一回だけ抱きしめて。」
「え・・み、蜜・・・好きって・・・何言って・・」

困ってる豪を尻目に抱きつくと、今まで我慢していたものがあふれ出して
切なくなった。
豪の心臓がきもちいい。
広い肩。
雨に濡れた硬い髪。
豪の匂い。

「元気でね。豪。」
「みっ！蜜！」

あたしは抑えきれない涙を拭いながら2階にある自分の部屋に駆け込んだ。

夜、豪が家を出て行く時もずっと部屋にいた。

もう二度と会わない。

ばいばい。豪。

フとおいしそうな香りに我に返る。
そーだ、確かあの女に引っ張られてきたんだ。

「はい！オムライス。あたし料理は得意なんです！」
「てかここ・・・」
「あたしんちです！」
「はあ！？なんでアンタんちに連れてこられてオムライス食べなきゃなんねーんだよ！」
「元気なかったから。これ食べて元気出してください！
それと、わざわざ財布届けてもらったお礼です！！どーぞ、召し上がれ！」

強引なアンタは屈託のない笑顔で笑って見せた。

あったかいオムライスがあたしの冷えた心を少し温めてくれた気がする。

胸の奥からじわじわこみ上げてくるものを隠そうとして

いきおいよくオムライスを食べた。

アンタはいっつもあたしの側で笑ってくれてた。

第5話#蜜（後書き）

蜜と豪の過去が明らかになっちゃいました。
ありがちなパターンかもですね・・てか、ありがちッス・・・

第6話#蓋

「蜜～！蜜はどこ行ったんだ～！」

テレビ局の廊下でマネージャーの叫び声が響き渡る。大橋チャンだ。

「大橋チャン、ご苦労さまだね。」
「蓋っ！蜜がどこ行ったのか聞いてないっ？！もうプロデューサーとかみんな
カンカンなんだよっ！お、俺の首が危ないんだよ～～～～（泣）」
「呂氣！蜜の居場所とか検討つく？」
「さっぱりだな。アイツの行動はまったく理解できね～もん。
てか蓋！見ろよ！俺さっき人気ＡＶ女優の理奈チャンからケー番教
えてもらっちゃった～。
マジ感動っっ！！」
「・・・・・呂氣、お前女なら誰でもいいのか。」
「うんっ！！テヘ（笑）」

呂氣はかなりの女好きで、メンバー１のプレイボーイだ。
金色に染めた短髪で顔の至る箇所にピアスがついている。
身長も高く、誰にでも優しく（特に女）、よく笑っているので
モテ度も高い。年下から年上まで気にいられている。

「音は？？お前もわかんねーよな・・」
「蜜ちゃんって自分のこと話さないから～。わかんない。」
「だよな・・・。それはそーとお前今日は一段とかわいいな。
女の蜜よりかわいいなんてどーゆー事だよ。」
「蓋くん、今度俺のことそんないやらしい目で見たら俺バンド抜け
るからね！」

「馬鹿、冗談だよ！」

このちっさい小僧は音。
自分では身長１６５以上はあるとか言ってっけどたぶん嘘。
どう見ても１６０あるかないかだ。男のくせに肌もきれいで目もでかい。
一見女の子と間違うほどだ。
でもそれを言うとかなり怒る。

「はー、どこ行ったんだろな。アイツ・・」

そしてこの男はリーダーの蓋。
メンバー全員が彼を頼りにしている。
いつもクールで穏やかでお姉さま方からモテる。
感情を表情に出さないので何を考えてるのか分からなくなる時もたまに・・
でもやっぱりみんなの「蓋」なのだ。

蜜が何も言わずに朝からいなくなった日は歌番組の収録日だった。
生放送なので後で編集するわけにもいかず、
ボーカルがいないバンドは出演しないことになった。

「なんか俺達、そーとー蜜に振り回されてね？」
「呂氣・・」
「だってアイツ、ボーカルだろ？アイツがいなきゃ俺達だけじゃテレビも出してもらえねーのが現実じゃん。
超人気バンドとか言われてるけどさ、結局人気なのは蜜だけだろ。」
「俺もそう思うかな・・蜜ちゃんには悪いけど・・」
「音・・・」

蜜のわがままの度がすぎると俺達はいつもこうなる。
壁にぶつかるっていうか・・まとまりがなくなる。

「まっ、しょうがねーじゃん！俺らももっとがんばろうぜ？・・・なっ？」

「蓋・・・」
「蓋くん・・・」

蜜と俺達の出会いは高校生の時だった。

同じ学校の先輩、後輩だった呂氣と音。

二人とも軽音学部に入っていて、その頃からバンド活動はしていた。

俺は全然音楽に興味はなくて暇つぶしに行ったパンクライブも最初はつまらなかった。

飽きて帰ろうとしたその時に、

パンクライブな筈の会場にやさしい音色とバラードが耳に入ってきた。

ステージの上にはアコーステイックギターを膝に抱えて

マイクも使わず、地べたに座り込んで歌っている蜜がいた。
客はパンクライブ目当てに来ているもんだからブーイングが飛び交い
「ひっこめ！」コールが会場全体を包む。
マイクを使わず歌っている蜜の声は当然聞こえていない。
やがてライブハウスの中の客は飽きて帰り始めた。
でも俺はなかなかその姿から目を離すことが出来ず、その場に立ち尽くしていた。
俺のほかに客は2人・・
空っぽになったライブハウスにまた蜜の生声が戻ってくる。
目は閉じたまま、しゃがれた声のお前は一人歌い続けていた。
演奏が終わり、俺は拍手をしようとした。
その瞬間お前はいきなり立ち上がって持っていたギターを力いっぱい床に投げつけた。
何度も何度も・・
ギターが完全に壊れるのを見てお前は何も言わず去って行った。
呆然と見ていた俺に残りの客2人が話しかけてくる。

「なあっ！お前今あの子の事かっこいいと思ったよなっ？」

（なんだ？この顔面ピアスだらけの馬鹿丸出しな男は・・）

「絶対かっこいいと思ったはずだよ！ねえ！！？」

（お、男だったのか。この子。背もちっせーし喋らなかったら女と間違われるだろーな）

「お、おう。なんていうかオーラがすごかった・・」

俺は小さくつぶやいた。

「だろっ？一緒にバンドくもーぜ！！？お前顔いいから絶対ファンつくと思うんだ！」

ピアスの男がいきなり変なことを持ちかける。

「は？俺がバンド？！」

「うん！一緒にやろーよ！俺達、綾南高校でバンド組んでてギター探してたんだ！」

このちびっ子もピアスの仲間か・・・

「ちょっ・・待て。俺はギターなんかできねーぞ！」

「だいじょぶだよ！練習すれば誰でも弾けるよーになるからっ！」

そんなに簡単に弾けるわけねーだろ・・・

「おし！じゃあ決まりな！明日から早速練習開始だ！お前高校どこ？」

「芦屋だけど・・」

「お！なら俺らんトコと、ちけーじゃん！学校終わったらここのスタジオに来てくれ！」

「なにコレ」

ピアスがスタジオの宣伝が書いた紙を渡してきた。

「地図だよ！迷うといけねーし！」

「でもボーカルは？いんの？」

「さっきのあの子に決まってるじゃん！！あの子に俺達のバンドのボーカルになってもらう！話聞いてもらいに行こうよ！！」

そう言ってピアスの男とちびっ子は強引に俺をひっぱてステージの裏に行ったお前の後を追いかけていった。

その時掴まれた腕をふりほどこうと思えば簡単にできた。

「音楽なんか興味ねーし」って。

でも他に何にもすることもなかった。

まあ、いっかってノリで引き受けたあの頃はちょうど今から8年前・・

ピアスの男とちびっ子は今も俺と一緒にいる。

呂氣と音。

この二人がいなかったら今の俺はなかった。

なんとか蜜を説得して仲間に迎えいれたのはそれから1か月も後の事。

すでにこの頃から捻じ曲がっていた蜜はよく俺以外の2人とケンカをした。

まあ・・ケンカするほど仲がいいっていうし。うんうん。

音楽の方向性を話し合うと1秒もかからないうちに決まった。

「パンクバンドでいくにきまってんじゃん!!」

呂氣の一言。すかさず蜜が割って入る。

「パンクなんかだせーよ。そんなのこの世が終わってもやだ。」

「それだっ!世界の終わり・・・英語にするとワールドエンド。これにしよーぜ!バンド名!」

呂氣は一度言い出したら絶対折れない。

蜜は愕然として、音は何気に気に入ったらしい。

だいたい呂氣と音は高校の時からつるんでいるのもあって考え方や趣味が似ている。

(見た目は正反対だが・・・)

俺は早く決まれば何でもよかった。

俺の青春時代がフラッシュバックする。

懐かしい思い出。

「アイツ、帰ってきたらたっぷり説教だな！」

そんな独り言を言いながら今日も蜜が戻ってくるのを待つのが

俺の役目。

第6話#蓋（後書き）

実は大のビジュアル系好きな私。この話も私が前から書いてみたかったバンド内の友情アンド恋愛話・・。学生の頃はよくライブに行ってましたが社会人になってからは全くというほど縁がなくなってしまいました・・

あ～～～～～！！ライブいきて～～～～～っ！

第7話#遥

「あんた料理上手いんだね。」
「え！？」
ものすごい勢いでオムライスを食べ終わった彼女が唐突に言う。
「料理は好きで結構作るんで得意です！」
「自信満々だな。」
初めてあたしに見せた笑顔。
笑ってた方がかわいいのにな。

「誰もいないじゃん、家。」
「あ、いつも昼間はたいてい一人です。両親は共働きで、弟は学生だから・・」
「ふーん。そうなんだ。・・遥っていくつなの？歳。」
「な、なんであたしの名前？？！」
「財布届けにくる為に免許書見た。」
「あ～・・」
「佐藤　遥、歳は？」
「えと・・２０歳です。み、蜜さんは？」
「蜜でいーよ。あたし２４。アンタより４つも上。超ババアじゃん。」
「えっ！２４？！あたしてっきりもう３０手前ぐらいかと思ってた！」
「お前、失礼なやつだな・・」

彼女はあたしの言葉に驚いて髪をクシャっとかいた。
いつもはテレビやワイドショーしか映らない芸能人があたしの前で、
あたしの作ったオムライスを食べて、あたしとフツーに喋ってる。
なんかこの出来事があまりにも当たり前みたいな気がして実感がわかない・・・。

「ちょっと付き合ってほしいとこあんだけど。」

さっきまでのんきに喋っていた彼女が急にまじめな顔をする。

「どこ行くの？」

「初恋の人んとこ。」

外は風が冷たくまだ7時にもなっていないのに辺りは真っ暗。
あたしんちを一足出たところで蜜は深呼吸を1回した。
初恋の人のとこって言ってたけど、
こんな突然、芸能人が行ったりしていいのかな。
しかも何にもかんけーないあたしまでついてっちゃって・・

蜜はあたしより身長も高くて、歩く幅も大きい。
蜜の４歩後ろから早歩きで着いて行くあたしを
彼女は時々振り返って微笑む。
何も会話はなかったけど、すごく優しい空間があった。

「あのっ・・！まだですかっ！？もう結構歩いてるよ！」
「息、切れてやんの。お前もうちょっと体力つけた方がいいぜ？」
またイタズラした男の子みたいにニカッと笑って見せる。
今まで笑った所を見た事をなかったあたしは動揺する。

「着いた。ここ。」
家を出てからひたすら３０分近くは歩いただろう。
やっと彼女の長い足は止まってくれた。
見上げてみるとそこにはきれいな3階立ての新築アパートがたっていた。
「たしかここの2階。」

アパートの下にある集合ポストを確認する。

「あった。２０１、坂下。」

「ほんとに行くんですか！？大丈夫なのっ？？」

「だいじょぶだろ。あんたは心配しなくていいよ。」

「で、でも・・」

コツコツッと蜜のブーツが階段を上る。

あたしは何も言わないまま着いて行くだけしかできない。

２０１号室。

ピンポーン・・・

中からこっちに向かう足音が聞こえる。

そんな事なんておかまいなしに彼女はドアに鍵がかかってない事を確認すると、

何のためらいもなくドアを開けた。

まさか勝手に自分の家のドアを開けられようとは思っていなかったのだろう。

そこの居住者らしき男の人は、自分が玄関に辿り着く前に開いてい

たドアを
びっくりしながら見つめていた。

「み、蜜・・・？」

「よ。」

その人はこの現状が理解できていないように、目を大きく見開いていた。

彼女はそれでもいつもどうり落ち着いた様子で彼の事を見ている。

家の奥からヒョコッと顔を出してこちらを覗いてる人が二人いた。

若い男の人と、女の人。

女の人は晩ごはんでも作ってたのだろう、エプロンをしている。

「ど、どうしたんだよ。いきなり。」

「別に。元気かなーと思っ・・・」

蜜の言葉は止まり、家の奥から覗いている女の人を見ていた。

「あ、今みんなで飯食ってて・・彼女のサクラと友達の真智。」

「彼女・・？」

「ああ。」

一瞬凍ったような蜜の表情。

なに？どうしたの？？

「わっ！！なんで？本物のワールドエンドだ！どーゆー事？センパイ！」

もう一人、奥から覗いていた男の人が興奮した感じで近づいてくる。

「なんかわかんねーけど、よかったらお前も一緒に食うか？後ろの可愛い子も。」

「・・帰るぞ、遥」

「へっ？？」

「どーぞ彼女とお幸せにな。結婚式にはでねーから。」

蜜があたしの手を引っ張る。

あたしはぽかんとしてたもんだから、いきなり手を引っ張られて危うく転びそうになった。

「ちょっ・・！蜜！おいっ！なんか話があったんじゃねーのかよっ・・蜜っ！！！」

彼女が初恋の相手と言った相手が大声で引き止めるけど、蜜は聞かず、早足で来た道を戻る。

途中蜜が小さな声で呟いた。

「バカだな、あたし。なにやってんだか・・」

その人のアパートが見えなくなっても蜜はあたしの手をつかんだまま
だった。

つかまれた手はびっくりするほど冷たくて

儚げで、小さかった。

今日は天気が悪くて月が見えない。

あたしの横にいる蜜も

さっき来るときのように近くに感じられない。

肌寒いくらいになった気候の下で

蜜は震えていた。

それが寒さが原因かどうかはわかんないけど。

月が出てなくてよかった。

じゃないと、

月の明かりが彼女の顔を照らしちゃうから・・

今は彼女の顔は、見れない。

第7話#遥（後書き）

豪と蜜・・どうなるんでしょうか。
たぶん上手くはいかないでしょうが・・・（暴露）
見守ってあげてください。

第8話#トラウマ

あの月が見えなかった日から1週間。
蜜とメールをするようになった。

でもやっぱり彼女はみんなの人気者だから、送って、返事がきて、
また送って、終わり。

芸能人の友達が出来て、少し有頂天になってんのかな。

なんか・・・

彼女の中にある闇が、いつか蜜を支配してしまいそうな気がする。

「なに考えてんだろ、あたし。考えすぎだよねっ！うん！そうだよ！」

バイトがない昼下がりの日曜。

熱いコーヒーを口に流し込みながらそんな事を考える。

「気分転換に買い物でも行こっ！もう冬物買っとかなきゃな。」

お気に入りの服に着替えていざ、出発！！！

休日の街はものすごく人が多い。どこを見ても人、人。人！
たぶん空から見たら、アリんこがぎっしりつまってるんだろな～。。
。

「あ～イヤな想像しちゃった。やめよ！
最初は本屋にでも行こうかな。あのマンガの続き出てるかもっ。」

本屋とCD屋が合体している店内に入ると、聞いたことのある声が
スピーカーから流れていた。
ワールドエンドのかなりうるさめの新曲。

蜜のしゃがれてつぶれた声がシャウトする。

「今頃何してんのかな～・・・」
「アレ！？君、この前の？？」
「えっ？」

ボーっと立ったままのあたしの横から明るい男の子の声がした。

「オレ！あ～覚えてないよな～。この前ワールドエンドのボーカル
と豪センパイのうちに来た時にいたんだけど。」
「・・・・あっ！！！あのときの！」
「そうそう！思い出してくれた？？」
「は、はい！」

確か蜜の好きな人の家にいた人だよね・・・ビックリした～。

「まさかこんなとこで再会するとは思わなかったわ～。なに？買い物？」
「はい・・・。」
「オレも！せっかくバイト休みだから遊ぶぞ～！と思ってきたんだけど、友達にはドタキャンされるわ、人多すぎて酔うわマジ最悪！ちょっとここで非難中」
「は、はあ・・・」
「ねえ！ヒマ？一人？」
「はい、ひ、一人ですけど・・・」
「じゃあ暇つぶしに付き合ってよ！オレちょ～ヒマ！いろいろ話してみたいしさっ」
「えっっっ！？？」
「けって～い★まずは腹ごしらえだな！ウン。どっか食べにいこ～ぜ！」

なっ・・！！？なんなの～？？この展開っ！！

こ、こ、こ、困ります～～～～～～！！！！！！！
てか・・・・イヤ～～～～～！！

無理やり引っ張られてこられたトコは街から少し離れた静かなオープンカフェ。

彼はオーダーしたパスタランチを15分もかからないくらいの速さで完食して

最後にオレンジジュースをゴキュっと飲んだ。

「紅茶だけでいいの??強引に連れてきちゃったしオレ払うからなんか食べたら?」
「あ、だ・・大丈夫です!お、おかまいなく!」
「なんかカチンコチンじゃね?(笑)別に緊張とかしなくていいよ?まあ、人気読者モデルのオレと一緒に飯食ってて緊張するのはわかるけど・・・
なんちゃって★(笑)」
「え!モ、モデルさんなんですか?ごめんなさい、し、知りませんでした。」
「どえっ!!?なんだよ~超恥ずかしいじゃんオレ~!!」
「ごっ!ごめんなさい!!」
「プっ。ウソだよ!気にしないで。オレももっとがんばんなきゃな~。
天狗になってたわ!!」

なんかこの人の笑顔、癒されるなあ。

よく見るとイケメンだし★

あたし・・・もう大丈夫なのかな。

「オレ、和泉　真智。23歳。大学生兼、雑誌の読者モデルしてるんだ。」
「え・・・イズミマチさん??」
「うん!変わった名前でしょ。でもオレは気にいってるんだけどね。」
「変わってるけど・・・いい名前だと思います!」
「だろっ??ありがと!そっちは?」
「あたしは・・・佐藤　遥っていいます。20歳でフリーターです。

」
「遥ちゃんか！よろしくね！ところで、あのワールドエンドのボーカルと友達なの??」
「あ・・・はい。・・・い、いや知り合いです。」
「知り合い?」
「はい。彼女達のライブに行った事がキッカケで・・・」
「ふーん。でもこの前いきなり来た時はオレかなりびびったよ（笑）」
「あたしも！・・・です。急に好きな人ん家に行くって蜜がいうから・・・」
「え・・・好きな人?」
「はい。あの家にいた方です。」
「・・・・マジで?」

カフェから出て、ざわついてる街を一巡りすると
あたし達は別れた。

彼、イズミくんは途中から真剣な顔をして黙りこんだかと思うと、
また満面の笑みを浮かべてたわいもない話で笑わせてくれた。

「あ～やっぱまだ直ってないか・・」

家に帰りついて洗面台に向かって自分を見る。

首にじんましんの跡が残っている。

男性恐怖症。

小さい頃に隣に住んでた３０前後の男の人に拉致されて以来、知らない男の人が怖い。

極度ではない。

友達の彼氏、人が大勢いるところなら平気。

でも二人っきりになると怖くなってじんましんが出てしまう。

でもイズミくんはなんか怖くなかった。

じんましんは出たけど、隣にいてイヤじゃなかったのに。

「直ったかもって思ったんだけどな～。ダメか。」

ピピピ・・・

「メール・・誰だろ。蜜??」

（よ。今歌番組の待ち時間。腹減ったー。歌わせる前になんか食わせろよっつーの。
あのハゲディレクター。）

「プっ・・こんな事メールするんだ。でもよかった。元気そう。」

（さっきね、この前蜜の好きな人の家行ったでしょ？その時にいた男の子とばったり会ったんだよ！！すごいビックリ★これから歌番がんばってね！）

（おー。テキトーだけどな。また気向いたらアンタん家行くかも～。またオムライス食わせろよー。じゃあなー）

蜜。

ずっとあの頃のまんま変わらないで・・・

ずっとかっこいい蜜でいてね。

「好きな人って・・・だってあの二人・・・兄妹だろ・・」

今から本格的に寒い寒い冬が来る。

全身に突き刺さるような

あの痛い風が

今年も吹き荒れる。

第8話#トラウマ（後書き）

時間があいてしまいました・・・。
これからは闇期になります。それぞれの思いがどうなるか・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8792c/

みつばち

2010年10月13日17時26分発行